

巻きつもの

エウエウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヤギ族の獣人エイリルは寒い冬の日、オラリオにきました。

「モンスターには慣れませんがダンジョンにはなれました」そういつて少年は今日もダンジョンに潜る。一人前の大人になるために。

目次

プロローグ

1

ファミリア

6

プロローグ

寒い寒い今にも雪が降りそうな冬の日、迷宮のある都市『オラリオ』に今しがた到着した隊商がありました。その十一の馬車の群れの中の一つに女の子の様な少年が乗っています。少年の名はエイリル、小さく丸まった角を持つヤギ族の獣人です。他のヤギ族のように尻尾はありませんが。

エイリルは一年と半年ほど前に村長の許可を得てから、住んでいた森を出て町に住みました。町で色んなお店で働きながら『オラリオ』に行くための旅費を貯めていました。ですが旅費を溜まる理由はひよんなことから無くなりました。隊商です。町に来た隊商がエイリルを含む数人の少年少女を隊商の雑用として雇ったのです。

隊商で働く賃金は至って普通でした。いえ、むしろ住んでいる町から離れモンスターに遭遇する危険を背負うのですから、少し安いのかもかもしれません。しかし雇われた少年少女は気にしません。もちろんエイリルも。

隊商の最終目的地は『オラリオ』、『迷宮都市オラリオ』です。年頃の少年少女にとつてそこで強くなって名声を得るのはよくある願望ユメです。エイリルは名声には興味ありませんでしたが、似たような口でした。

隊商は四つの都市と一つの国を通り抜け、大きく遠回りをしてオラリオにつきました。

隊商での出来事は正しく値千金の出来事でした。植物の毒の有無の見分け方。様々な武器の扱い方。文字の読み書きも、不完全だったものが完璧になりました。剣を扱いは赤子でしたが、旅の終わりには立派な青年です。

「おう、エイリルの嬢ちゃん。旅はどうだったか？ いい予習になっただろ？」

オラリオに行く旅で得た、大切なものを思い出していたエイリルに話しかけてきたのはドワーフの商人。隊商の中で香辛料を始めとした調味料の運搬を担当している商人です。

「予習……はい！ とても良い勉強になりました！」

そう元氣よく笑顔で返事をするドワーフの商人は満面の笑みを浮かべて乱暴に撫でます。分厚いその右手はずっしりとして、熱がこもっています。不快ではありません。嬢ちゃんとからかわれていますが、それは家族を相手しているようで非常に好ましいものでした。

「よし！ ならば後は実践だけだな！」

そう言うドワーフの商人は撫でる右手を腰に吊るした小型の鞆に納め、すぐさま引き抜きます。何かを握っているようでしたが、その大きな手のひらに隠されそれが何な

の分かりません。

「おっ……そうだ。エイリルの嬢ちゃんに渡したい物があつたんだ。少し目をつぶつてくれないか？」

エイリルは勿論、目を閉じます。ドワーフの商人は「いつけねえ、忘れとつた忘れとつた」そう言葉を苦笑交じりに零しています。そうして目を閉じていると首に何かをかけられました。「もういいぞ」そんな言葉を頼りに目を開きます。

「へへっ中々に似合つてるじゃねか、予想通り絵になるぜ」

目を開いた先にはドワーフの商人が少し離れ、両手の指で四角を作っていました。続いて首にかけらえた物を取ります。それは白い小さな結晶が沢山入った透明な小瓶でした。白い結晶には心当たりがありました。塩です。ドワーフの商人は塩が大好きだったのです。

「いいか、塩には色んな使い道がある。——「食事によし、体力によし、気つけによし、でしたよね？」—— おう、よく憶えてたな」

「当然です。食事の時や稽古の度に言われたら、たとえ忘れても直ぐに思い出しますよ」

そうして他愛の会話をしていた二人でしたが別れの時間が訪れました。雇用の契約はオラリオに着くまで、そこからは各自自由に動く約束でした。勿論隊商についてい

くの勝手ですが、そんな事はしません。旅の半分は隊商としての仕事を手伝いましたが、もう半分は冒険者としての技能を教えられたからです。丹念に教え込まれた事を無駄にする程、エイリルは薄情ではありません。

「よし、そろそろお別れだな。まあお前さんは他の子らと違って心配いらねえが気をつけるよ。『ダンジョン』てのは上手くないことだらけだから」

そういつてドワーフの商人は鞘に収まった片刃の剣を渡してきました。

「そいつは餞別だ。正直ギルドで支給される武器は安物ばかりで、すぐ壊れるからな」

そう言うのと彼はすぐさま馬車に乗り込み馬車を走らせます。なんだか言いたいことを言われてばかりで自分から話せませんでした。本当はもっとお礼とか言いたいことがありましたが、それは次回にすることにしました。生きていればまた会えるからです。その時は冒険者として立派になれている頃でしょう。

エイリルはそう思い改め歩き出そうとして、声を吐き出します。

「またねっ！エイドルフ……！」

遠ざかった馬車からは親指を上げたおつきな握り拳が見えました。そのおおきな手のひらは立派でエイリルにとっては憧れの一つです。

立派になること。それがエイリルの願望です。それは特別でも何でもありません。

がエイリルの願望^{ユメ}なのです。中途半端のエイリルにとってそれは間違いなく憧れ^{ユメ}なのです。

エイリルは今度こそ歩き出しました。向かう先は北西の第七区と呼ばれる通称『冒険者通り』です。そこには冒険者ギルドがあります。『ファミリア』に入る前に行け、エイドルフが会話の途中で教えてくれた事です。距離は遠いですがこれくらいは苦にもなりません。

エイリルは歩きます。歩きます。雪が降つてきました。この分なら時期に積もるでしょう。冒険者ギルドに行く前に宿を確保した方がいいかもしれません。

ファミリア

雪が降ってきました。冒険者のギルドがある第七地区を行き交う人々の吐く息は皆、一様に白く凍えています。そんな中で、エイリルは宿屋を後にして歩を進めました。

宿を取ったのは正解でした。雪は既に積もり始めています。これから雪の勢いはどんどんと強くなって吹雪になるでしょう。こういう日は防寒のしっかりした部屋で休まないと大変なことになってしまいます。もし防寒のない部屋で休んだら寒すぎて死んでしまうかもしれません。あんな思いエイリルはこりごりです。

宿から歩いて数分、白い柱が特徴的な神殿の様な建物がありました。ギルドです。風も吹き始めてきています。

数秒、ほんの数秒だけエイリルは神殿を見つめ、歩き出します。しかし、歩き始めるエイリルを呼び止める声がありました。それは隊商がオラリオに到着する少し前に会話を交わした旅の仲間の声です。

「見つけたわ！ エイリル！」

声の方向にエイリルは振り向きまます。そこには種族がバラバラな三人組がいました。

声をかけたのはエルフの少女ユファイ。肩まで伸びた銀色の髪が綺麗な子です。他の二人は狼ウルフ人の女の子リイルと小人バルムの男の子ルガイドです。リイルは紫色の髪を腰まで伸ばして、瞳の色が太陽のように真っ赤な女の子です。ルガイドは赤色の伸びた髪を紐で一纏めにしている、この四人の中で一番年上で背が低いです。

「私たちを出し抜けるとは思わないでよね。リイルの嗅覚は凄いんだからー!」

ユファイは自慢げに語ります。隊商はオラリオに着いた時点で積み荷を各店に卸すために別れます。ユファイ達は希少な鉱石を担当していた隊商のセフィルと途中まで一緒に行動していました。そこでエイリルと同じように餞別を貰いました。そして『豊穡の女主人』でエイリルのことを待っていたのです。しかしエイリルは現れませんでした。おかしいと思い始めた所で商品を卸しに来たエイドルフが現れ、エイリルが『豊穡の女主人』に向かつてない事を知ったのです。そこからは大変でした。エイリルとエイドルフが別れた所まで走り、リイルの鼻を頼りにエイリルの後を追ったのです。そうしてエイリルの宿泊する宿を突き止め、追いついたのです。もしエイリルが軽食を取っていなかったらユファイ達は追いつけなかったでしょう。

「頑張ったよ、エイリル。ぶいー!」

「俺は最初から『冒険者通り』に向かうべきだと言っただけだな、聞いてくれねえのよ、ハハハハ」

リイルが握りこぶしから人差し指と中指を伸す、神々で言う『ピース』と呼ばれるポーズを両手で行い、ルガイドが恨めしそうに話します。

「そうですか。それでは」

そういつてエイリルはギルドに入るべく歩を進めました。

「ちよつとまちなさいよつ！ 先に言うべき事があるでしょう！」

当然それをユファイが止めます。彼女は心は今、約束を反故にされ怒りに満ちています。それもその筈でした。彼女はエルフで約束事は千年経っても忘れません。それがエルフという種族なのです。彼女はオラリオに着く前にこう三人に約束しました。”誰が一番早く『ファミリア』に入れるか競争ね！ 場所は『豊穡の女主人』って店で！”彼女は競争が楽しみで仕方ありませんでした。しかしリイルとルガイドは約束通り集まりましたが、エイリルはいつまでたつても来ませんでした。

「さあ、言い訳があるのなら言ってみなさい！」

「すみません。ファミリアに入ってから集合だと思っていました」

エイリルは即答で答えます。言い訳のように聞こえますがエイリルにそのつもりはありません。本当にそうだと思っていたのです。非はもちろんエイリルにあるのですが、ユファイも生真面目な子で、こんなに素直に謝れたら怒るに怒れません。むしろ分かりやすく言わなかった自分が悪いのかもしれない。そう思っていました。

「二人ともそんなところで固まってる中で中に入ろうぜ。流石にさみいよ。ユファイも競争をしたいなら一旦仕切り直そうぜ」

そう言ったのは一番年上で一番背の低いルガイドです。彼はこうして仲裁を図ることが多く、隊商の子供たちの中では兄貴分として親しまれていました。

「うん、中に入ろうよ、頬が真っ赤だよユファイ。競い合うのが好きなのは分かる、けどルガイドの言う通り仕切り直すべき」

リイルがユファイの手を取ってルガイドに続きます。

「……分かったわよ。けど、一番早く『ファミリア』に入るの私。そして一番早く『レベル』を上げるのは私よ……!」

「それは競争ですか? 宣言ですか? なら負けませんが」

エイリルは笑顔でそう言いました。ユファイは無意識で煽るエイリルをみて、カチンと頭に来ました。彼女は負けず嫌いなのです。

「いいわよ、競争ね。ただし、一番の人の言う事を四番目の人が聞くってルールも追加で。いいわね! リイル、ルガイド!」

そう言つてユファイはリイルの手を引っ張つてギルドの中に入ります。当然、エイリルも後に続きます。最後のルガイドは苦笑して、三人を追い越すべく駆け出しました。